

研修員's VOICE

Vol. 22

世界各国からJICA沖縄にやって来た
研修員を紹介しています。



ノンステップバス(低床バス)に試乗するゾラさん

氏名: Ms. GELEGPIL Erdenezul (ゾラさん)

国名: モンゴル国

研修期間: 2019年1月20日 ~ 2019年2月2日

コース名: 障害者リーダーシップ育成



持続可能な開発目標 (SDGs) とは、「誰一人取り残さないーNo one will be left behind」を理念として、国際社会が2030年までに貧困を撲滅し、持続可能な社会を実現するための重要な指針で、17のゴールが設定されています。JICAはSDGsの達成に向けて積極的に取り組み、17のゴールに貢献する研修を実施しています。

モンゴルってどんな国？

アジア大陸中央部、ロシアと中国に囲まれた内陸国で、人口318万人(2017年)、国土の大半を草原地帯が占め、古くから遊牧民族として有名です。現在の主産業は鉱工業で、首都ウランバートルに全人口の半分が集中しています。

経済発展著しいモンゴルは、2009年に国連障害者権利条約に批准、2016年には障害者権利法を制定するなど、障害者の人権や社会参加促進も理解されつつあります。一方で、社会環境は障害者の特性やニーズに対応しておらず、障害者は弱者であり介護される対象という固定観念もあり、障害者の社会進出はまだ進んでいないという現状があります。

私は現在DET (Disability Equality Training 障害平等研修) のファシリテーターとして活動しています。DETは、障害が人にあるのではなく、まわりの環境をみんなで変えれば障害を解決できるという意識の変革を目的とし、障害当事者が進行役を務めることが特徴です。私自身もDETを学ぶ中で「障害は自分自身の問題」という考えから、「社会が変われば自分は今のままでいいんだ」という思いに変化しました。企業向けにDET研修を実施した後、その企業が車いすでも利用できる適切なスロープを作った実績もあり、受講者の意識の変化を感じています。



DETファシリテーター養成講座終了式(前列左端がゾラさん)

沖縄での学び、今後の夢は

沖縄研修では、障害者の就労/自立支援、情報アクセシビリティ、施設や公共機関のバリアフリーなど多くを学びました。沖縄では障害を持つ方が(重度の障害があっても)就労していること、ヘルパーの手を借りて一人暮らしをしていることに驚くと同時に、誇らしく思いました。これまでの歴史の中で障害者自身が声を上げ闘った結果、現在の制度や環境を勝ち取り、障害者が社会参加していることは本当に素晴らしいです。首里城や美ら海水族館の見学時には私自身、誰の手も借りずに、自分が見たいものを見たいように見学できたことが嬉しく、観光地として有名な沖縄のバリアフリーへの取組みに感心しました。

沖縄で学んだことをモンゴルでも実現できれば、モンゴルの障害者も社会で普通に生活できます。障害の程度に関係なく、全ての人が平等に生きていける社会、誰にとってもやさしい社会を作ることが私の夢です。

沖縄研修に同行した照屋専門家のひと言

今回の研修で、高嶺豊氏(エンパワメント沖縄理事長)、長位鈴子氏(自立生活センターイルカ代表)、新垣正樹氏(北部自立生活センター希輝々所長)という障害当事者でもあり、沖縄の障害者支援の中心的存在でもある方々に研修員がお会いできた意義はとても大きいです。彼らは今後研修員がモンゴルで行政や企業にどういふ声をあげ、アプローチをしていくかのロールモデルであり、非常に良い経験になったと思います。帰国後の研修員の活動に期待します。



首里城の車いす用リフト体験